

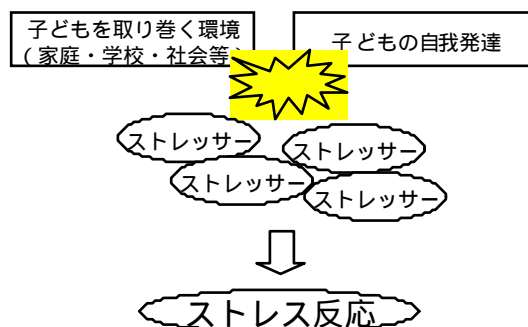
問題と目的

現在，学校教育において憂慮されている問題の一つに不登校問題がある。不登校に対する教育的対応としては，臨床心理士等によるスクールカウンセラーの導入や適応指導教室の設置，また，福祉施設や病院に入院した場合，入院者を対象とする情緒障害児学級，病弱学級，病弱養護学校などによる対応がなされている。しかし，不登校児童生徒の数は増え続けており，平成13年度は全国で13万人を超える社会現象ともなっている（文部科学省学校基本調査・2002）。

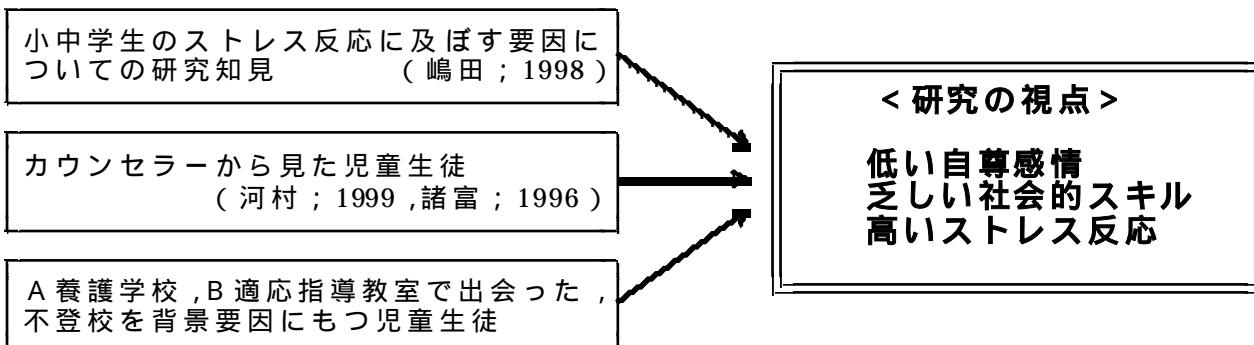
1 不登校の捉え方

山崎（1988）は不登校のメカニズムを，「子どもを取り巻く様々な環境（家庭，学校，社会等）と子どもの自我発達がかみ合わないことがストレスになる。そして，そのストレスが，対人関係トラブルなどをきっかけに，ストレス反応を引き起こし，現象としての不登校が生じている」と指摘している（右図）。筆者が，これまでにかかわった不登校を背景要因にもつ生徒たちも，山崎のメカニズムで説明できる部分が多い。そこで，本研究では，山崎の知見に基づき，論を進めるものとする。

不登校のメカニズム



2 研究の視点



3 研究の仮説

研究の視点に基づき，本研究では次の仮説を設定した。

- 1 不登校群は，登校群に比べて，自尊心 と社会的スキルが低く，ストレス反応が高いだろう
- 2 自尊心と社会的スキルはストレス反応に影響を及ぼす変数であろう

不登校群の特徴，ストレス反応に影響を及ぼす変数を明らかにすることによって，不登校の予防や解決に向けた教育的対応の示唆を得たい。

なお，本研究で用いる用語に関しては，次のように定義して用いる。

自尊心；人が持っている自尊心，自己受容などを含め，自分自身についての感じ方のこと。自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚，感情（遠藤，1992）
社会的スキル；社会的に受け入れられるか，社会的に価値があるとされるやり方で，自分にも他人にも利益になるように相互交渉する能力（川島，1997）
ストレス反応；心身の適応能力に課せられる要求（ストレス）によって，引き起こされる心身の緊張状態（岡安，1999）

方法

1 対象

不登校群(21名);過去に不登校経験のあるX県内のA養護学校中学部生徒10名(1年男子1名・女子2名,2年男子1名・女子4名,3年男子2名),B適応指導教室通級中学生11名(1年男子1名,2年男子4名・女子3名,3年男子2名・女子1名)

登校群(95名);X県公立中学校生徒95名(1年男子15名・女子15名,2年男子16名・女子14名,3年男子18名・女子17名)

2 測定尺度

対象生徒に対して実施した質問紙は,以下の3尺度によって構成された。(資料参照)

(1) 自尊感情尺度(Rosenberg,1965,星野命訳,1970)

10項目。評定は「まったくそう思わない(1点)」から「いつもそう思う(4点)」までの4件法を用いた。得点が高いほど,自尊感情が高いとした。

(2) 中学生用社会的スキル尺度(戸ヶ崎他,1997を一部修正)

5つの下位尺度(友人関係の維持,友人関係の向上,友人との関係づくり,自己主張,教師との関係づくり)から構成された34項目。評定は「全然当てはまらない(1点)」から「よく当てはまる(4点)」までの4件法を用いた。得点が高いほど,自分の持つスキルの認知が高いとした。

(3) 中学生用ストレス反応尺度(三浦他,1995を一部修正)

4つの下位尺度(不機嫌・怒り感情,抑うつ・不安感情,身体的反応,無気力)から構成された22項目。評定は「全然当てはまらない(1点)」から「よく当てはまる(4点)」までの4件法を用いた。得点が高いほど,ストレス反応が高いとした。

結果と考察

1 不登校群と登校群の比較

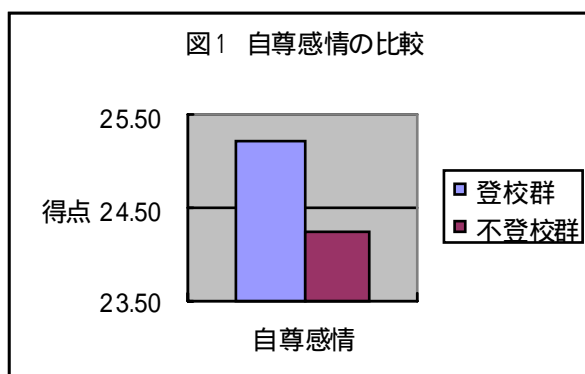
不登校群と登校群を比較するために,自尊感情,社会的スキル,ストレス反応の各変数の合計得点について,統計処理(t検定;平均の差を検定。資料参照)を行った。その結果,自尊感情,ストレス反応に関しては両群間に差がなかったが,社会的スキル下位尺度の友人との関係づくりスキルは,不登校群が登校群よりも有意に低かった($p<.05$)。自己主張スキルも不登校群が登校群よりも低い傾向が示された($p<.10$)。逆に,友人関係の維持スキルは,不登校群が登校群よりも高い傾向が示された($p<.10$)。

(1) 自尊感情について

自尊感情得点は,不登校群と登校群の間に有意差は認められなかった

不登校群の学習環境は,共に10人前後の集団規模である,個々のペースを考慮した柔軟な学習活動が大切にされている,一人の生徒に教師が十分にかかわることができる等の共通点がある。そうした学習活動の中で「できる自分」を感じ,自尊感情が徐々に高まっているのではないかと推測される。それゆえに,当初予想したような両群の差が明らかにならなかったのではないかと考えられる。

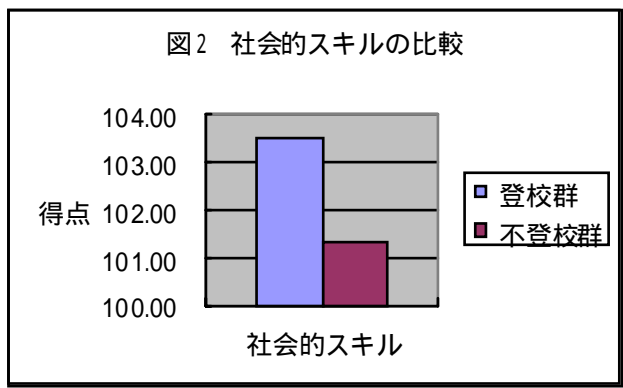
図1 自尊感情の比較



(2) 社会的スキル，社会的スキル下位尺度について

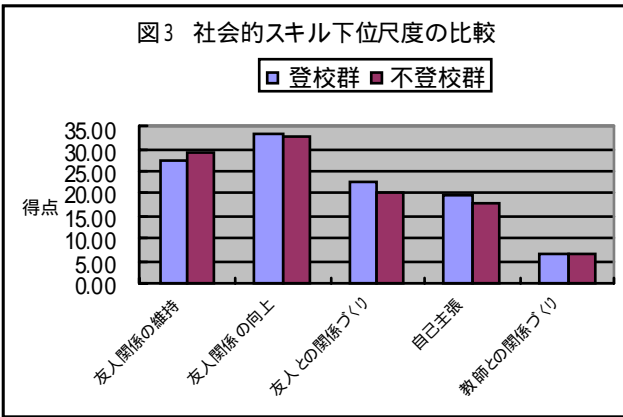
社会的スキル総得点は，不登校群と登校群の間に有意差は認められなかった

自尊感情の考察に示したように，不登校群がスキルを発揮しやすい学習環境が整えられているため，登校群との差がなかったのではないかと考えられる。



友人との関係づくりスキルは，不登校群が登校群に比べ有意に低かった ($p < .05$)

渡辺・蒲田 (1999) は相談室に来談中の生徒を不登校群として，登校生徒と比較した結果，特に，「他人が話しているところに気軽に参加できる」項目が有意に低いということを指摘している。また，Leary (1989) は，対人関係における不安が，「進行中の会話に十分に参加しない」，「他の人と一緒にいることを好まない」等の抑制・回避行動を伴うことを指摘している。本研究の結果も，これらの見解を支持するものであると考えられる。



友人関係の維持スキルは，不登校群は登校群に比べ高い傾向があった ($p < .10$)

本間・三澤 (2000) は適応指導教室に通う中学生を不登校群として，公立中学校に通う登校群との間で，社会的スキル得点について t 検定を行った結果，「話したいことがあっても友だちの話を最後まで聞いてから話す」，「こんなことを言ったら相手に悪いと思うことは言わないようにする」など，他者を気遣う，遠慮するといった受動的なスキルについては，不登校群の方が有意に高いという指摘をしている。同様に，本研究の結果から，不登校群は受動的スキルを駆使して周囲とかかわっているのではないかと考えられる。

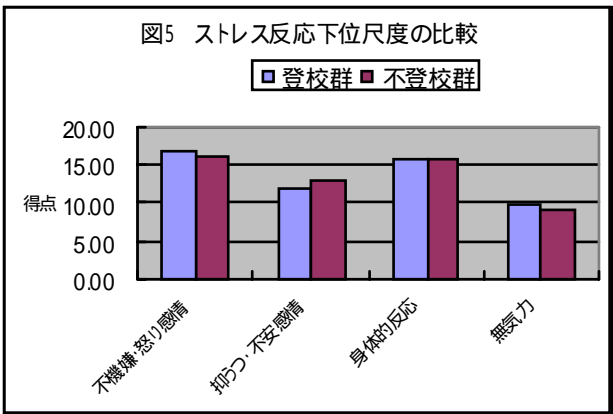
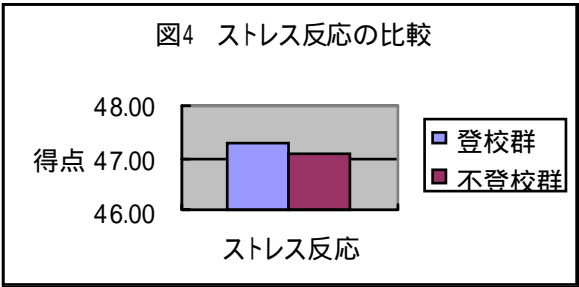
自己主張スキルは，不登校群は登校群に比べ低い傾向があった ($p < .10$)

相手の反応を気遣う，受動的な行動方略をとる不登校群の場合，自分を積極的に打ち出す自己主張スキルが低いことは十分考えられる。

(3) ストレス反応，ストレス反応下位尺度について

ストレス反応総得点は，登校群と登校群の間に有意差は認められなかった

菊島(1997)は，大学生を対象に，自らの高校時代を振り返る回顧的研究を行い，不登校群は登校群に比べ，多くのストレスがあることを指摘している。その中で，特に「学校における集団行動」，「決まった時間の登校」など，学校生活上要請される行動規範や義務がストレスになっていると述べている。本研究の不登校群は，先に示したとおり，個々のペースを考慮した柔軟な学習活動が大切にされており，要請される行動規範や義務が公立中学校に比べるとゆるやかであるということが大きな特徴である。かつて不登校を経験しているということを考慮し，無理をさせずに，徐々に学習活動の機会，量を増やしていくことが基本的な対応である。そのような学習環境が生徒の不機嫌・怒り感情や抑うつ・不安感情等のストレス反応を抑制し，登校群との間に有意な差を生まなかった理由ではないかと考えられる。

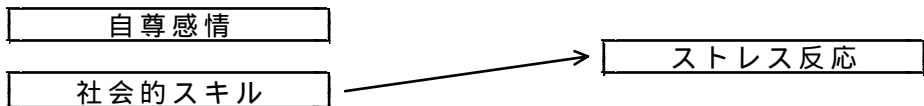


2 自尊感情，社会的スキルがストレス反応に及ぼす影響

自尊感情，及び社会的スキルが，不登校群，登校群のストレス反応に影響を及ぼすかどうかを明らかにするために，統計処理（回帰分析；因果モデルを設定し，結果に対する原因の影響を検定）を行った。

(1) 不登校群の結果

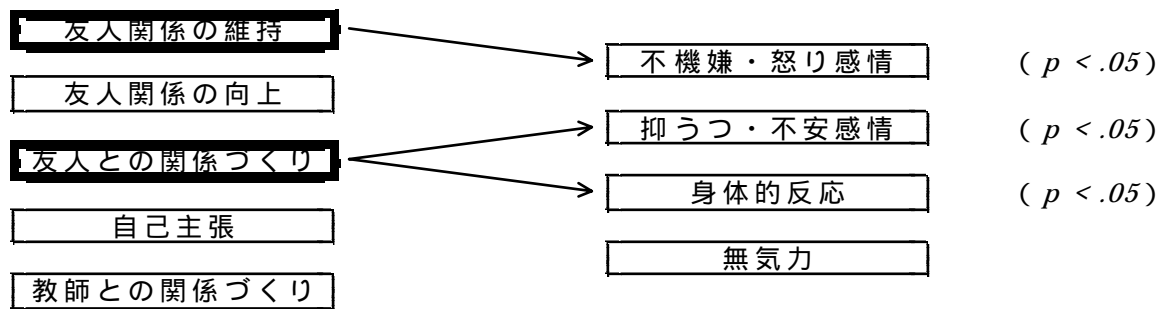
自尊感情と社会的スキルが，ストレス反応に及ぼす影響



自尊感情と社会的スキルだけでは，ストレス反応を説明できないことが明らかになった。社会的スキルの影響のみが有意傾向として示された ($p < .10$)。

他の変数がストレス反応に影響していると考えられる。例えば，嶋田(1998)は，小中学生を対象にした研究ではあるが，社会的スキルの他に，ソーシャルサポート，自己効力感の影響も指摘している。

社会的スキル下位尺度が，ストレス反応下位尺度に及ぼす影響



ア 友人関係の維持スキルが有意 ($p < .05$)

友人関係の維持スキルは、「友だちをおどかしたり，友だちにいばったりしない」等，相手に不快な感情を与えないようにするスキルであり，このスキルの高い生徒は不機嫌・怒り感情に陥ることが少ないということが明らかになった。このスキルを用いる生徒は，不機嫌・怒りといったストレス反応を軽減させているが，それは相手に不快な感情を与えないように行動することで相手から望ましい反応を引き出していることが考えられる。

< 求められる対応 >

相手との関係を維持するための**受動的スキルのトレーニング**は効果的であるとされる。しかし，このスキルを中心的に用いた場合，相手に不快な感情を与えないための行動が自らの行動抑制につながることもあり，適応的な行動に結びつかないこともある。それゆえ，このスキルを十分に習得していても対人不安やストレス反応を生じている場合には，考え方や認知の仕方の修正を目的とした**認知的アプローチ**の必要性が示唆される。

イ 友人との関係づくりが有意 ($p < .05$)

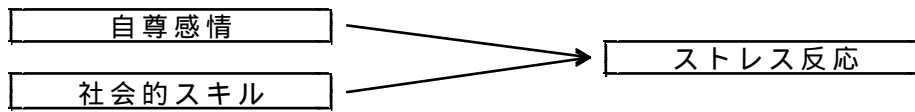
友人との関係づくりスキルは、「休み時間に友だちとおしゃべりをする」等の質問項目に示されるように，能動的に関係を形成していくスキルであり，このスキルの高い生徒は抑うつ・不安感情に陥ることが少なく，身体的反応を示すことも少ないということが明らかになった。

< 求められる対応 >

積極的に友人との関係づくりの**スキル向上をはかるプログラム**を取り入れる必要性が示唆される。西澤・田上（2001）は情緒障害児学級に通う不登校児童に対して，**対人関係ゲーム**を導入した結果，学級内の他児とふれあい，友人との関係づくりが促進され，学級復帰したケースレポートを示している。

(2) 登校群の結果

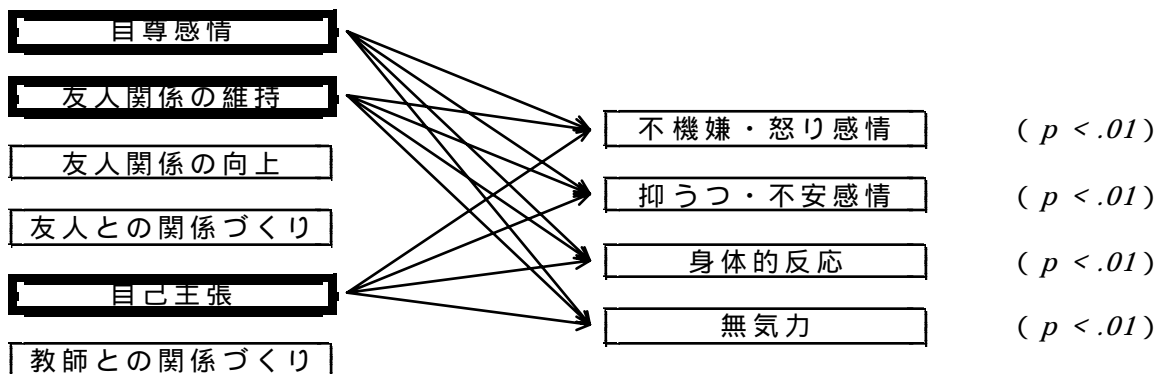
自尊感情と社会的スキルが，ストレス反応に及ぼす影響



自尊感情と社会的スキルの2変数で，ストレス反応を説明できることが明らかになった。特に，自尊感情の影響が強いことがわかった。

ストレスマネジメント(ストレス軽減をめざした介入)として，自尊感情，社会的スキルに視点を当てた対応が求められる。

自尊感情，社会的スキル下位尺度が，ストレス反応下位尺度に及ぼす影響



* 「友人関係の維持」「抑うつ・不安感情」，「身体的反応」は，($p < .05$)

ア 自尊感情が有意 ($p < .01$)

自尊感情は，ストレス反応下位尺度全てに有意であり，自尊感情の高い生徒は，「不機嫌・怒り感情」他のストレス反応を起こすことが少ないということが明らかになった。自尊感情の影響は，不登校群には現れなかった結果であり，登校群の特徴といえる。

< 求められる対応 >

マズローの欲求階層説では，「自尊欲求」は，「基本欲求」，「安全欲求」，「愛情欲求」がクリアされて生ずるといわれる。自尊感情は「自己評価の感情」であり，思春期段階では周囲の評価が大きく影響する。特に，友人からの評価が大きい。それゆえ，「友人に認めてもらった」と思えるような諸活動を準備したい。学習面，行事，部活動などを活躍の場として活用したい。また，「自分のことが好きになる」エクササイズが数多く用意されている，**構成的グループエンカウンター**も効果的であると考えられる。

イ 友人関係の維持スキルが有意 ($p < .01$)

不登校群と同様に，友人関係の維持スキルの影響も明らかになった。ストレス反応下位尺度全てに有意であるので，不登校群以上に，この受動的スキルが重要ということである。

< 求められる対応 >

不登校群同様，相手との関係を維持するための**受動的スキルのトレーニング**，**及び，認知的アプローチ**の必要性が示唆される。

ウ 自己主張スキルが有意 ($p < .01$)

自己主張スキルは，ストレス反応下位尺度全てに有意であり，スキルの高い生徒は，「不機嫌・怒り感情」他のストレス反応を起こすことが少ないということが明らかになった。このスキルの影響は，不登校群には現れなかった結果であり，登校群の特徴といえる。

< 求められる対応 >

自己主張スキルは，「言いたいことだけを言う」ようなスキルのことではない。自分も相手も尊重しながら自分の思いを伝えるコミュニケーションスキルである（平木，1993）。曾山（2002）は，院内学級生徒に自己主張訓練（アサーション・トレーニング）を導入した結果，ストレスマネジメントとして効果的だったという事例を示している。

まとめと今後の課題

1 不登校群の特徴

友人との関係づくりスキルが低い（有意， $p < .05$ ）

友人関係の維持スキルが高い（有意傾向， $p < .10$ ）

自己主張スキルが低い（有意傾向， $p < .10$ ）

2 ストレス反応に及ぼす影響

(1) 不登校群

社会的スキルがストレス反応に影響（有意傾向， $p < .10$ ）

社会的スキル → ストレス反応

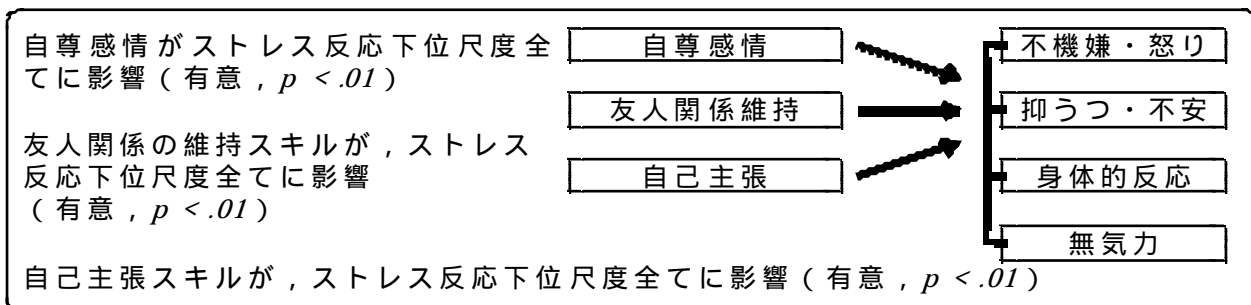
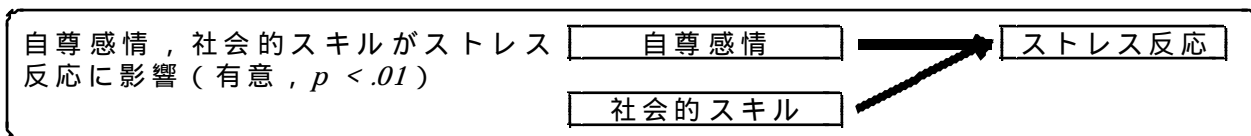
友人関係の維持スキルが，不機嫌・怒り感情に影響（有意， $p < .05$ ）

友人関係維持 → 不機嫌・怒り

友人との関係づくりスキルが，抑うつ・不安感情と身体的反応に影響（有意， $p < .05$ ）

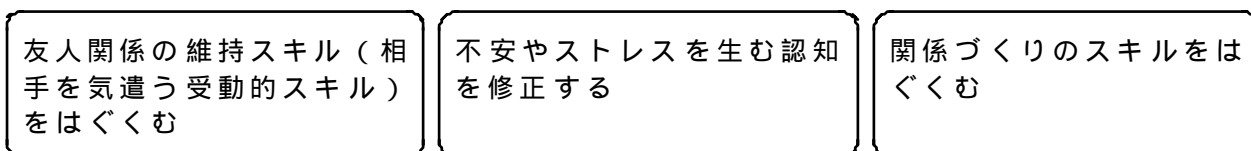
友人関係づくり → 抑うつ・不安
友人関係づくり → 身体的反応

(2) 登校群

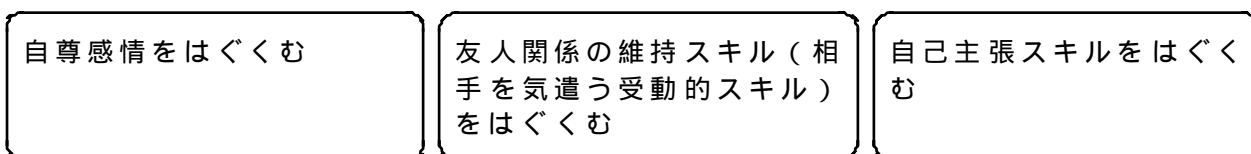


3 求められる対応

(1) 不登校群が元気になるために



(2) 登校群が元気になるために



4 課題

(1) 不登校群の対象

本研究で対象とした不登校群は，A 養護学校，B 適応指導教室に通学している生徒である。過去の不登校経験という共通点はあるが，時間割，構成人数等の学習環境は異なっている。また，小泉（1980），牧田（1992），秋田県総合教育センター（1999）他の研究に示されているように，不登校は「神経症型」，「無気力型」等，いくつかのタイプに分類して捉えられている。そうした点を考慮すると，養護学校，適応指導教室の生徒を一群にまとめて分析したことが，本研究の問題点であり，今後に向けた課題である。

(2) 質問紙

本研究で行った生徒自身による自己評定についても，その限界を押さえる必要がある。不登校生徒の意識に関して，辻（1987）は「不登校生徒は，他者が自分をどう見ているかということへの意識が強く，自分を普通に見せようとして行動する」傾向があるという指摘をしている。この辻の知見から，生徒の実態をよりの確に捉えるためには，生徒の自己評定だけでなく，教師からの他者評定を加えるなど，多様な角度からの評定が必要であろうと考えられる。

資 料

1 質問紙の項目

(1) 自尊感情尺度

1. 私はすべての点で自分に満足している
2. 私はときどき自分がでんでだめだと思う
3. 私は自分にはいくつか見どころがあると思っている
4. 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる
5. 私にはあまり得意に思うことがない
6. 私はときどきたしかに自分が役立たずだと感じる
7. 私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う
8. もう少し自分を尊敬できたならばと思う
9. どんな時でも例外なく自分も失敗者だと思いがちだ
10. 私は自分自身に対して前向きな態度をとっている

* 2, 5, 6, 8, 9番は、逆転項目

(2) 社会的スキル尺度

表 1 社会的スキル尺度の因子分析結果

質問項目	因子 負 荷 量					共通性
	1	2	3	4	5	
・友人関係の維持 (n = 9, $r = .87$)						
20. 友だちをおどかしたり, 友だちにいばったりする *	.72	.00	.00	.17	.00	.57
21. 友だちに乱暴な話し方をする *	.70	.00	.00	.11	.00	.51
23. 友だちのじゃまをする *	.69	.25	.00	.12	.00	.55
19. 自分のしてほしいことをむりやり友だちにさせる *	.68	.00	.00	.00	.00	.47
22. でしゃばりである *	.68	.00	.00	.11	.00	.47
24. 何でも友だちのせいにする *	.66	.25	.15	.00	.00	.52
25. まちがいしても素直にあやまらない *	.64	.21	.00	.00	.00	.47
30. 友だちの失敗を許せない *	.55	.00	.00	.00	-.18	.34
36. 自分の意見と違う友だちの考えを認められない *	.46	.37	.18	.00	.00	.37
・友人関係の向上 (n = 11, $r = .84$)						
9. 困っている友だちを助けてあげる	.00	.78	.00	.00	-.11	.64
10. 友だちが失敗したら励ましてあげる	.15	.71	.00	.13	.00	.54
34. 友だちの悩みや相談事をゆっくり聞いてあげる	.00	.62	.12	.00	.00	.41
11. 友だちの頼みを聞く	.24	.58	.00	.00	.00	.40
17. 友だちのけんかをうまくやめさせる	.14	.55	.00	.17	-.14	.37
18. 友だちの話をおもしろそうに聞く	.00	.55	.00	.00	.00	.35
14. 引き受けたことは最後までやり通す	.14	.52	.00	.00	.00	.30
12. 友だちがよくしてくれたときはお礼を言う	.17	.51	.00	-.24	.28	.42
37. 友だちと一緒に協力して行動する	-.15	.44	.29	.00	.00	.31
13. 相手の気持ちを考えて話す	.39	.43	.00	-.15	.00	.37
16. 自分に親切にしてくれる友だちには親切にしてあげる	.00	.43	.00	-.14	.20	.26
・友人との関係づくり (n = 7, $r = .86$)						
4. 休み時間に友だちとおしゃべりしない *	.00	.00	.81	.00	.00	.69
3. 友だちと離れて一人で遊ぶ *	.12	.17	.68	.12	-.16	.54
5. 友だちの遊びをじっと見ている *	.00	.19	.67	.12	.00	.51
7. 友だちに話しかけられない *	.00	.00	.67	.35	.16	.61
6. 自分から友だちの仲間に入れない *	.00	.12	.63	.48	.10	.65
1. 遊んでいる友だちの中に入れない *	.13	.12	.49	.46	.18	.52
2. 友だちに気軽に話しかける	-.15	.23	.43	.23	.19	.35
・自己主張 (n = 7, $r = .72$)						
33. 授業の中では発言できない *	-.12	-.14	.11	.50	.00	.31
6. 自分から友だちの仲間に入れない *	.00	.12	.63	.48	.10	.65
28. 質問されても自分の考えをうまく話せない *	.11	.00	.13	.48	.00	.26
1. 遊んでいる友だちの中に入れない *	.13	.12	.49	.46	.18	.52
32. 自分の気持ちと反対のことばかり話してしまう *	.14	.00	.00	.42	.00	.20
27. 言いたいことは相手に伝える	-.22	.22	.15	.41	.24	.35
8. 悩みごとを友だちに相談できない *	.13	.10	.37	.40	.00	.34
・先生との関係づくり (n = 2, $r = .68$)						
29. 先生に気軽に話しかける	.00	.23	.10	.20	.68	.57
35. 先生に話しかけられない *	.18	.12	.26	.26	.52	.45
負荷量平方和	4.38	4.34	3.35	2.17	1.34	
寄与率 (%)	11.84	11.74	9.07	5.87	3.63	
累積寄与率 (%)	11.84	23.57	32.64	38.51	42.14	

* 印は逆転項目

(2) ストレス反応尺度

表2 ストレス反応尺度の因子分析結果

質問項目	因子 負荷量				共通性
.不機嫌・怒り (n = 7, =.91)					
1. いらいらする	.81	.18	.19	.11	.74
2. 怒りを感じる	.83	.14	.15	.14	.76
3. 不愉快な気分だ	.73	.20	.20	.20	.65
4. 腹立たしい気分だ	.76	.32	.19	.00	.73
5. 誰かに怒りをぶつけたい	.67	.18	.17	.18	.54
6. 気持ちがむしゃくしゃしている	.66	.31	.25	.13	.61
10. 頭の中で考えがまとまらない	.41	.29	.20	.44	.49
.抑うつ・不安 (n = 6, =.91)					
13. みじめな気持ちだ	.26	.77	.15	.27	.75
14. 悲しい	.28	.79	.23	.19	.80
15. さみしい気持ちだ	.17	.79	.17	.17	.70
16. 泣きたい気分だ	.23	.73	.31	.14	.70
17. 心が暗い	.19	.57	.47	.00	.59
18. 不安を感じる	.28	.46	.47	.19	.55
.身体的反応 (n = 8, =.89)					
17. 心が暗い	.19	.57	.47	.00	.59
18. 不安を感じる	.28	.46	.47	.19	.55
19. 頭痛がする	.15	.13	.73	.00	.58
20. 頭がクラクラする	.24	.12	.78	.13	.70
21. 頭が重い	.17	.34	.78	.19	.79
22. 体から力がわいてこない	.17	.27	.58	.10	.45
23. 体が熱っぽい	.16	.17	.62	.00	.44
24. 体がだるい	.00	.00	.53	.23	.35
.無気力 (n = 4, =.81)					
7. 一つのこと集中できない	.21	.17	.00	.57	.41
8. 勉強が手につかない	.00	.16	.21	.75	.65
9. むずかしいことを考えられない	.16	.23	.20	.79	.74
10. 頭の中で考えがまとまらない	.41	.29	.20	.44	.49
負荷量平方和	4.16	3.97	3.80	2.30	
寄与率 (%)	17.35	16.54	15.80	9.60	
累積寄与率 (%)	17.35	33.89	49.69	59.29	

2 記述統計量

(1) 不登校群と登校群の比較 (平均値及び t 値)

変数	登校群 (n = 95)	不登校群 (n = 21)	t 値	自由度	
自尊感情	25.20 (4.90)	24.24 (4.90)	-.81	114	
社会的スキル総領域得点	103.49 (11.68)	101.33 (12.61)	-.76	114	
下位尺度	友人関係の維持	27.28 (4.90)	29.52 (4.33)	1.93 [†]	114
	友人関係の向上	33.48 (4.74)	32.71 (6.74)	-.62	114
	友人との関係づくり	22.89 (3.77)	20.10 (5.74)	-2.14*	23.97
	自己主張	19.92 (3.62)	18.10 (4.69)	-1.97 [†]	114
	教師との関係づくり	6.20 (1.52)	6.29 (1.49)	.24	114
ストレス反応総領域得点	47.27 (14.63)	47.05 (14.44)	-.06	114	
下位尺度	不機嫌・怒り感情	16.54 (5.73)	16.10 (5.52)	-.32	114
	抑うつ・不安感情	11.78 (5.10)	12.71 (5.10)	.76	114
	身体的反応	15.89 (6.23)	15.81 (6.04)	-.06	114
	無気力	9.68 (3.15)	9.14 (3.21)	-.71	114

() 内は標準偏差 † p<.10 * p<.05 ** p<.01

(2) 不登校群の回帰分析

ア ストレス反応に対する自尊感情，社会的スキルの回帰分析結果

投入順位	独立変数	従属変数	R	R ²	
1	自尊感情	ストレス反応総領域得点	.41	.08	-.01
2	社会的スキル総領域得点				

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

イ ストレス反応下位尺度に対する自尊感情の回帰分析結果

独立変数	従属変数	R	R ²	
自尊感情	不機嫌・怒り感情	.01	-.05	.01
	抑うつ・不安感情	.25	.02	-.25
	身体的反応	.02	-.05	.02
	無気力	.02	-.05	-.02

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

ウ ストレス反応下位尺度に対する社会的スキル下位尺度の回帰分析結果

投入順位	独立変数	従属変数	R	R ²	
1	友人関係の維持	不機嫌・怒り感情	.50	.22	-.50*
1	友人との関係づくり	抑うつ・不安感情	.48	.19	-.48*
1	友人との関係づくり	身体的反応	.50	.17	-.50*

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

(3) 登校群の回帰分析

ア ストレス反応に対する自尊感情，社会的スキルの回帰分析結果

投入順位	独立変数	従属変数	R	R ²	
1	自尊感情	ストレス反応総領域得点	.64	.40	-.45**
2	社会的スキル総領域得点				

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

イ ストレス反応下位尺度に対する自尊感情の回帰分析結果

独立変数	従属変数	R	R ²	
自尊感情	不機嫌・怒り感情	.54	.28	-.54**
	抑うつ・不安感情	.53	.27	-.53**
	身体的反応	.41	.16	-.41**
	無気力	.49	.23	-.49**

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

ウ ストレス反応下位尺度に対する社会的スキル下位尺度の回帰分析結果

投入順位	独立変数	従属変数	R	R ²	
1	友人関係の維持	不機嫌・怒り感情	.49	.23	-.39**
2	自己主張				
1	自己主張	抑うつ・不安感情	.45	.18	-.34**
2	友人関係の維持				
1	自己主張	身体的反応	.42	.16	-.33**
2	友人関係の維持				
1	友人関係の維持	無気力	.43	.17	-.30**
2	自己主張				

† p<.10 * p<.05 ** p<.01

文献

- ・ Rosenberg, M (1965) Society and the adolescent self-image , Princeton, N.J. Princeton University Press
- ・ M. R. リアリー , R. S. ミラー , 安藤清志 , 渡辺浪二 , 大坊郁夫訳 (1989) 不適応と臨床の社会心理学 . 誠信書房
- ・ 秋田県総合教育センター (1999) タイプや状態に応じた不登校児童生徒への対応 . 秋田県総合教育センター研究紀要
- ・ 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (1992) セルフエスティームの心理学 . ナカニシヤ出版
- ・ 岡安孝弘 (1999) ストレス . 有斐閣心理学辞典 . 有斐閣 , 475
- ・ 河村茂雄 (1999) 学級崩壊に学ぶ . 誠信書房
- ・ 川島一夫 (1997) 発達を考えた児童理解・生徒指導 . 福村出版
- ・ 菊島勝也 (1997) 不登校傾向におけるストレスとソーシャル・サポートの研究 . 健康心理学研究 , Vol.10 , 2 , 11-20
- ・ 小泉英二 (1980) 続登校拒否～治療の再検討～ , 学事出版
- ・ 嶋田洋徳 (1998) 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 . 風間書房
- ・ 曾山和彦 (2002) 院内学級に通う児童生徒に対するストレスマネジメント～構成的グループエンカウンター・アサーショントレーニングを取り入れて , 第 35 回日本カウンセリング学会発表論文集
- ・ 辻平治郎 (1987) 登校拒否児の対人認知スタイルと他者認知 . 甲南女子大学人間科学年報 12 号 , 59-72
- ・ 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 (1997) 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係 . 健康心理学研究 . Vol.10 . No.1 , 23-32
- ・ 西澤佳代・田上不二夫 (2001) 対人関係ゲーム・プログラムによる不登校児の指導 . カウンセリング研究 . 第 34 巻 第 2 号 , 78-88
- ・ 星野命 (1970) 感情の心理と教育 (一 , 二) , 児童心理 24
- ・ 平木典子 (1993) アサーション・トレーニング . 日本・精神技術研究所
- ・ 本間恵美子・三澤綾子 (2000) 不登校中学生における自己意識・他者意識と社会的スキル . 秋田大学教育文化学部研究紀要 . 教育科学第 56 集 , 41-49
- ・ 牧田浩 (1992) 地域における不登校・登校拒否の実態 . 障害者問題研究 69
- ・ 三浦正江・福田三奈子・坂野雄二 (1995) 中学生の学校ストレスとストレス反応の継時的変化 . 日本教育心理学会第 36 回総会発表論文集 , 555
- ・ 諸富祥彦 (1996) こころの教育の進め方 . 教育開発研究所
- ・ 文部科学省 (2002) 生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について
- ・ 山崎久美子 (1988) 登校拒否の現況と今日的視点 . 現代のエスプリ 250 , 9-23
- ・ 渡辺弥生・蒲田いずみ (1999) 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル - 登校児と不登校児の比較 - . 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇) . 第 49 号 , 337-351